

皮膚科のトリビア

218

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」, そこから転じて「瑣末なこと」となり, 今では雑学的知識, 豆知識, などを意味する言葉として定着している。

本欄は, 小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ, 連載しています。ご意見等ございましたら, ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和4年4月30日

急性腎不全をきたした
ウンバチイソギンチャク刺症

50歳代男性。沖縄県のビーチでダイビングをしていたところ, 左前腕が異物に接触, 激痛を伴った。その後接触部は不整形の紫斑となり, 発赤, 腫脹, 熱感を生じてきた。紫斑部は感覚鈍麻を生じていた。BUN 35.0 mg/dL, Cr 8.29 mg/dLと急性腎不全を呈していた。皮膚生検では真皮上層の毛細血管内に血栓形成を認めた。プレドニソロン30 mg/日の内服で腎障害, 皮膚症状は改善した。

ウンバチイソギンチャクは直径10~20 cm, 岩やサンゴ足盤に付着している。緑褐色が目立たないが猛毒をもつイソギンチャク。表面に多くの刺胞を含んだ刺胞球がある。処置としては, 海水で刺胞球を洗い流し, 氷や冷水で冷やすこと。

酢をかけると刺胞の発射が促進される場合があるため, 酢は絶対に使わないように, とのこと。

一言コメント

「沖縄県警察のHPで確認した。ウンバチとは海の蜂という意味で, その名の通り, 触手に触れると, 蜂に刺されたような疼痛を感じるとのこと。腎障害の原因は抽出毒による腎内皮の直接障害と血栓らしい。」

●第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和4年4月30日

モデルナアームの統計

モデルナ社の新型コロナワクチン接種後7日ほどして, 接種部位に生じる紅斑, 腫脹。モデルナアームと呼ばれ話題になった。初回接種後の4~6週後に聞き取り調査を行った。

対象者5,893例(男性3,318例, 女性2,575例)のうち, 747例(12.7%)が遅発性大型局所反応を経験した。

発生率は, 男性で5.1%, 女性で22.4%で女性に有意に高かった。年齢層別でみると, 18~29歳で9.0%, 30~39歳で14.3%, 40~49歳で15.8%, 50~59歳で14.9%, 60~69歳で12.6%, 70歳以上で10.5%で, 40歳代がピーク。

発症までの期間は男性が女性より早く, 症状の持続は男性が女性より短かった。

一言コメント

「初回接種後には当院にも多くの患者が来院したが, その後は接種が継続されているにもかかわらず, 来院する患者はいなくなった。重篤な副作用ではないという認識で来院しなくなったのか, 発症自体が減ったのか。不思議である。」

●某企業主催Web講演会から

令和4年5月14日

「足病」の定義

日本フットケア・足病医学会が「足病」の定義を確立し、公表した。「起立・歩行に影響する下肢・足の形態的、機能的障害(循環障害、神経障害)や感染とそれに付随する足病変に加え、日常生活を脅かす非健康的な管理されていない下肢・足を足病と定義する」。

下肢救済がもっとも大きなテーマだが、疾病発症前の未病の段階を病気と捉えていることが特徴。

一言コメント

「診断、治療だけではなく、発症予防を主旨とする学会では、多くのコメディカルが活躍している。日本褥瘡学会に近い雰囲気を感じた。」

●某製薬会社主催Web講演会から

令和4年5月26日

デュピルマブで改善しない顔の紅斑

アトピー性皮膚炎の治療にデュピルマブ(抗IL-4/13製剤)を投与した際、体幹・四肢の病変は改善しても、顔面の病変のみが治療に反応しないことがある。治療に反応しなかった顔面の紅斑を生検した。

表皮の肥厚がやや目立ち、サイトカインプロファイルを見ると、IL-22が増加していた。IL-22はTh22細胞から産生され、皮膚の苔癬化や痒疹の発症に関与するとされている。デュピルマブ不応例にはIL-13/22の同時阻害が有効との報告もある。

一言コメント

「IL-22抗体(フェザキヌマブ)を用いた第II相臨床試験がすでに行われているようだ。デュピルマブに反応しない顔面の病変は、接触皮膚炎、酒皰、乾癬の合併などの鑑別も必要とのこと。今後は複数の抗体製剤を用いるようになるのかもしれない。」

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

D-dimer高値の急性蕁麻疹に血栓形成はあるのか

急性蕁麻疹においては、血中D-dimerが一過性の高値を示すことがある。30歳代男性の症例では、急性期にD-dimerが19.8 $\mu\text{g/mL}$ と高値で血栓形成が懸念されたが、可溶性フィブリンを測定したところ6.3 $\mu\text{g/mL}$ と正常値であった。同様に10歳代男児でもD-dimerが11.7 $\mu\text{g/mL}$ に対し、可溶性フィブリンは3.0 $\mu\text{g/mL}$ 以下と正常であった。急性蕁麻疹ではD-dimerと可溶性フィブリンを併せて測定するのがよい。

一言コメント

「蕁麻疹の一部は、凝固因子の活性化によって補体成分C5aが産生され、それが肥満細胞および末梢血好塩基球を活性化し、ヒスタミンなどが放出されるという過程に関連している。病理組織学的には血栓自体は形成されていないという理解でいいのだろう。」

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

ヒラタチャタテによるアナフィラキシー

50歳代男性。オーツ麦、乾燥ココナッツ、野菜ジュース摂取30分後に全身の発赤、咽頭違和感、下痢、嘔吐が出現した。患者が摂取したオーツ麦のプリックテストが陽性。ただし未開封品では陰性。摂取したオーツ麦のパッケージに虫が混入していて、ヒラタチャタテと同定された。患者血中ヒラタチャタテ特異的抗原IgEが陽性で、確定診断に至った。

ヒラタチャタテは日本各地に普通に生息している食品害虫で、成虫でも1 mm程度、形はアリに似ていて、活発に動き回る。最近では喘息患者の吸入性アレルギーであると報告されている。

一言コメント

「穀類、マカロニなどの貯蔵加工品のほか、畳、ダンボール、そばがら枕などを加害するとのこと。ハウスダストと同じように、アトピー性皮膚炎の悪化因子にもなっているのではないかと思った。」